

第1回京都府総合計画策定検討委員会 【議事概要】

1. 日 時

令和8年7月6日（月）9:00～10:30

2. 開催場所

京都ブライトンホテル 地下1階 英の間

3. 出席者

【委 員】山極座長、奥野委員、小畑委員、柴田委員、藺田委員、時吉委員、中小路委員、吉本委員

【京都府】西脇知事、鈴木副知事、松浦総合政策環境部長、白波瀬総合政策環境部副部長、米倉総合政策室長、宮田総合政策室企画参事

4. 議事内容

- 「わくわくする京都」が目指すべき姿という中で、まずは人にスポットを当てたいと考えており、高齢化率が増えていく中で、経験値のある方々が主体的に社会に関わることができるステージが与えられるということが大事。
- 若い方により一層活躍する場を提供していくことはもちろんだが、役職定年とされる55歳を過ぎても、健康である限りは社会に関わり、主体的に自分の人生を描いていけるような、そういう京都の在り方が望まれるのではないか。
- 新しい技術や知見が出てくる中で、働く人も学び直しを続けることが大切。生涯を通じてやりたい仕事を続けていく、あるいは社会参加や社会貢献を続けていくことができる京都は、働く人にとって「わくわくする京都」になると思う。
- 新しい機会に挑戦するために、企業は人を教育し、新しい能力を養成していく。能力を身につけた人材がまた新しい機会に挑戦し、次のイノベーションを起こしていくという循環が生まれていく中で、働く人のモチベーション、エンゲージメントが高まってくる。エンゲージメントの向上が変革を起こし企業を成長させるという姿が、企業から見たときの「わくわくする京都」ではないかと思う。

- 社会から見た「わくわくする京都」は、多様性に対する寛容さや、自由活発な雰囲気や風土がしっかりある社会。その中で新しいことに挑戦する人を育てていく、あるいはそのために学び直しをしようする人に機会をしっかりと提供していくことで、働く人の自己実現と、企業の成長が絡み合い、非常に躍動感のある社会が生まれる。
- 働く人・企業・社会という3つの主体が、学び直しや教育を軸にしながら、その挑戦とイノベーションの循環を回していくという社会ができると、人も投資も集まり、永続的に生き生きと活動が続けることができ、その結果、人も企業も社会も成長していける、そんな姿が京都の「わくわく」する姿ではないか。
- こうしたわくわくする姿というのは、まさに京都が歴史の中で、磨いてきたDNAそのものであり、歴史的に磨き続けてきた京都だからこそできる、京都ならではのわくわくする姿なのではないか。
- 「未来に希望が持てるまち京都」が「わくわくする京都」ではないかと考える。
- 挑戦できる環境は重要であり、人や企業が挑戦し、それを応援するということが循環していきつながっていけば、わくわくも広がっていくのではないか。人は挑戦する人を応援することでも「わくわく」を感じる。若い人やこれからやっていく人が挑戦するだけがワクワクするのではなく、それを応援していくことができる街というのも、「わくわくする京都」につながるのではないか。
- 「わくわく」は与えられるものや行政が作るものではなく、それぞれの人が心や体を動かし、挑戦や交流することを通じて、生まれるものであり、計画には、挑戦が生まれやすい環境や人を動かす仕組みを入れ込んでいただきたい。
- まだ知らないものとの出会いや、まだないものの創出、あるいは現状より前に進んでいくようなイメージ、そういうときに「わくわく」を感じる。行政は目の前の取り組まざるを得ない課題に追われることが多く、それらに対応しつつ、プラスαとして「わくわく」を創り出すということは非常に重要なテーマ。
- 「わくわく」という感情は常に安心感がないと生まれてこないため、安心や安全の基盤はしっかり積み上げる必要があります、行政としても積極的に取り組むべき分野ではないか。
- また、人それぞれ様々な考えがあり、なにが「わくわく」かと一律的に決めることは難しいため、多様な人の価値観や生き方、ライフスタイルに寄り添うべきであり、府民に対していろんな選択肢が用意されている状態を創り出すことが非常に大事。多様性の尊重もわくわくの1つの根源になるのではないか。

- 「4. 変化し続ける社会で誰もが生涯にわたって輝き続ける京都の実現」は、多様な方々が活躍できる、能力を発揮できるという非常に素晴らしい「わくわくする京都」の中核のひとつになるのではないか。
- 多様な文化がある中で、特にどういった地域のどういった人が制約を感じているのかを定量的に分析することにより、そこにフォーカスした支援を行うワイズスペンディングな施策立案ができれば、「わくわくする京都」づくりに向けて状況がさらに改善するのではないか。
- 少子化については、京都府でも状況は改善している面があると思う。その中で多様な人材が能力を発揮しやすい、性別によって制限がないということが非常に重要であり、子どもを持とうとしている若い方、未婚の男女、正規・非正規雇用等の多様な方がいる中で、自分の能力が十分に発揮できる社会だと感じられると、府外への流出の予防になる。
- 現行計画の指標のうち、「仕事をはじめ社会的な生活を営む上で、自分の持っている才能や知識、技量などが十分に発揮できていると思う人の割合」は直近3か年では50%前後であり、「今の社会は性別によってやりたいことが制限されていると思わない人の割合」も50%前後。高くはないが、逆に言えば伸びしろがあるとも言える。地域、性別、属性、年齢層などの観点から、定量的に分析を行えば、才能等を発揮できていないと感じている人々や、性別により制限されていると思う人々に向けたアプローチも可能になるため、今後の計画においては、定量的な分析を通じて、より効果的な形で支援を展開する必要がある。
- 大学生という立場から、京都のどんなところがわくわくするかと考えてみると、やはり、京都と言えば、寺社仏閣など中心部の京都市内をイメージするが、混雑等を理由に足が遠のく面もある。
- 大学生は手軽にアクセスできる場所に遊びに行く傾向があり、似通ったところで遊ぶイメージがあるが、中心部だけでなく、郊外にどのような魅力があるのかをもっと知りたいと思う。
- 「京都にこういうところがあるから今度行ってみたい」となるような場所の広報を、京都市以外にもどういうところがあるのかという観点でもっと広めていければ、学生にとってももっと「わくわくする京都」になるのではないか。
- 人口減少の著しい町村部では、少数の人間であっても、それぞれの地域で支え合い、助け合う、地域力の向上が基本となる。その上で、しっかりとした生産や生活のシステムを構築することが重要であり、今後はスマートシュリンクを考慮していくことも必要。

- 金銭的な支援で移住を促すような施策ではなく、雇用や住宅、教育などの環境整備をした上で、地域の魅力を掘り起こし、生活を豊かにするような多角的な施策を講じるべき。
- 今いる人々に喜んでもらうまちづくりをすれば、人も来るのではないか。そのために、府内町村それぞれが自らのまちに今あるものを最大限に生かし、身の丈に合った仕組みをつくる必要がある。
- 自然・景観・歴史・伝統文化・地場産業等に磨きをかけ、地域を総合的にプロデュースすることで、魅力を世界に発信し、交流人口・関係人口の増加を図るとともに、定住人口の減少に歯止めをかけ、地域経済の好循環を生み出すことが重要。
- 京都で感じる「わくわく」は、静謐な自然や人とのつながりの中で感じる穏やかな幸福感ではないか。寺社仏閣や鴨川、多くの大学など、京都ならではの資源を利用しながら、他都市にはない独自の魅力を磨いていくことが重要。
- AI 時代の到来によって個別最適な社会の実現が進み、個性や多様性がより重視されるなか、伝統産業や四季の文化など京都が持つ豊かな暮らしの価値を国内外へ発信し、京都独自の「わくわく」を追求していく必要。
- 人口減少社会においては、個人の能力向上だけでなく、人と人との信頼関係や地域のつながりを重視した地域づくりが重要。また、社会人になった後も学び直しや新たな挑戦ができる環境づくりが求められている。
- 人口減少を前提としながらも、「先進的で魅力的な少数社会」という新たな視点で地域のあり方を考える必要があり、そのためには地域おこし協力隊や関係人口など地域外の人材も積極的に受け入れ、多様な主体が地域に関わる仕組みづくりが重要。
- 経済主体の抱える不安が何かをしっかりと把握し、その一つ一つを緩和させていくための施策の積み重ねが、「わくわく」の前提として重要。
- 循環を回す主体は働く人と企業であり、企業の中でも特に中小企業群が強く魅力ある企業になっていかないと、よい循環は生まれなため、中小企業の経営者が学ぶ機会が重要。中小企業に対する攻めの施策を積み上げていくことが、産業の裾野を非常に強く魅力的なものにすることになり、それにより生産性が向上すれば、人口減少・人手不足の問題の解決にもつながるのではないか。
- 北部地域に、従業員のやる気の創出と地域との融和をうまく行っている企業が複数ある。会社のある地域を大事に思い、どのようにして地域で事業を成長させるのか。地域とともに成長するという視点が大切。

- 舞鶴の神崎におけるらっきょう畑の開拓のように、地域を守るために活動されている方と域外の方をマッチングすることによるコミュニティづくりは、地域の魅力を深掘するという意味で参考になるのではないかな。
- 地域づくりにおいては、地域固有の暮らしや文化そのものを価値として生かし、その魅力に共感する人々を受け入れていく視点が必要。また、人をたくさん集めることを目的化するのではなく、地域の暮らしを守りながら関係人口やインバウンドを受け入れるべき。
- インバウンドや関係人口の受入れについては地域の受容力を踏まえた無理のない仕組みづくりが求められるとともに、若者や地域内外の人材が協働することで新たな仕事や地域内の循環を生み出す必要。
- 京都の将来像を検討するに当たっては、国内外の先進事例や定量的なデータを活用しながら議論を深めていく必要。
- 京都独自の「わくわく」について、日本の他の地域や世界の様々人口減少に直面している地域が、何をやっているかということの資料を揃えていただき、様々な視野で検討したい。
- 地域にある多様な資源をどう生かしていくかは、行政に求められる重要な要素。行政がどう支援できるか、どう地域と一緒に取り組めるかが重要だが、一方で、行政は全体に当てはめるルールを定め、公平性の担保を図ることも必要であり、個別のニーズに合わせた柔軟な支援とどのように両立させるかが難しい時代になっている。
- AI が得意とする相関関係の分析だけでは捉えきれない、人の信念や予想外の出来事から生まれる「わくわく」が重要。自然や人との出会い、人間関係の中で生まれる偶発性や創造性は人間ならではの価値であり、そうした可能性を育むことが豊かな社会につながる。
- 予想外の出来事や新たな可能性が生まれる社会こそが「わくわくする社会」であり、AI と共存しながらも、人間ならではの創造性や多様性を生かした「わくわくする社会」づくりを進めることが重要。